

ローマ人への手紙14章 「互いに受け入れる共同体」

1A 裁かない 1-12

1B 神の受容 1-4

2B 主に対する確信 5-6

3B 主に対する命 7-9

4B 神への申し開き 10-12

2A 躓かせない 13-23

1B 心を痛める兄弟 13-15

2B 神の国 16-18

3B 平和 19-21

4B 自分の中での確信

本文

ローマ人への手紙 14 章を見ていきます。14 章は、一見、信仰によって義と認められるという神の福音に、付け足しのようにパウロが教えているように見えます。けれども、パウロの、ローマ人への手紙にある大きな主題は、実は 14 章から 15 章の始まりのところにあるのではないかと、この意見さえあります。それは、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つになっているというのが教会ですが、非常に生々しい意見の対立が起こっていたと考えられるからです。

ユダヤ人だけでなくギリシア人も、信じる者を救う神の力が福音ですが、信仰のあるユダヤ人とギリシア人が一つになっているというのはその通りでも、現実的にその信仰の持ち方が大きく異なり、時に対立するようなことも起こります。ユダヤ人は律法を守る文化の中に生きていましたが、異邦人は無律法の生活に慣れていました。ユダヤ人は、偶像礼拝を避ける習慣を持っていましたが、異邦人はいつも偶像を共存していました。それぞれが救われて、その与えられた信仰を働かせる時に、具体的なことについて、「私は肉を食べない」「私は肉を食べる」という正反対のことを言い、行動に取ることさえあるのです。

日本にいる宣教師の友人で、面白いことを教えてくれました。彼はロック音楽が大好きで、それでエレキギターをやっていました。イエス様を信じてから、ギターから遠ざかったそうです。それは、そのロックの音楽の中には、神を冒瀆するような歌詞もしばしば含まれていて、また、過去の罪の生活がギター演奏と関わっていたので、それでギターに触れると、主に対して賛美を奏でる道具ではなく、昔のことを思い出してしまうからです。けれども、もちろん全くそのような問題はない人たちは、ギターによって神を賛美しています。世界には、ヘビーメタルのキリスト者のバンドさえ存在します。彼らは、自分が救われて、それで与えられている能力を使って、神を賛美して、また人々に

イエスを伝えたいと願っています。一方では、ギターから疎遠になり、もう一方では、ギターをなおのこと奏でて、イエス様のために用いている人々もいます。

パウロは、このことが実際の問題になっていて、心に重荷として抱いていながら、14章になって、初めて具体的なことを取り上げているのではないか？と思われる。11章では、異邦人がイスラエルに対して高慢にならないように、という戒めをして、12章では、「兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。(10節)」とありますね。ですから、これまでも話してきたのですが、14章と15章前半で、はっきりと「互いを受け入れ合いなさい」と教えているのです。

1A 裁かない 1-12

1B 神の受容 1-4

¹ 信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。² ある人は何を食べてもよいと信じていますが、弱い人は野菜しか食べません。

パウロは、「信仰の弱い人」について話していますが、12章3節で、「神が各自に分け与えてくださった信仰の量り」があるのだと教えていました。信仰の量りの中で、信仰の弱い人もいるのという現実を、知る必要があります。そして、その意見についてさばくことなく、その人を受け入れるという忍耐が必要です。

そして、「意見をさばいてはいけません」と言っています。この「意見」は、「疑わしいもの」というような意味合いの言葉です。つまり、意見がわかれること、はっきりと明確な答えが出せないものということです。私たちには、はっきりしているものがありますね。恵みの福音そのものがそうです。パウロは、ガラテヤの教会に対して、日や月を守っているような彼らについて、福音から離れてしまったことを教えています。キリストにある神の救いの他に、何か他のものを付け足す時、それはもはや福音ではない、別の福音であり、アナテマ、呪われるべきと言ったのです。けれども、肉を食べずに野菜だけを食するという人々が、別に、律法を守ることによって救われるとは思っていません。そうではなく、一度、偶像に献げられたものであれば、もうその肉が汚れていると考えてしまったと、考えてしまっていたのです。そういった意見についてのことです。

私たちには、福音の真理というはっきりしたことがあります。また罪についても、はっきりと列挙されています。13章において、「13:13 遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼らしい、品位のある生き方をしようではありませんか。」とありました。これらは、闇の行いです。これらを罪であるとするのは、ここで言っている「さばいている」とか、「受け入れていない」ということではありません。罪を罪とすることをしてはいけない、ということではなく、必ずしも罪と言われていることについて、そこに良心の咎めを感じている敏感になっている人々もいるということです。

けれども、そういったことから自由にされている人々もいるといて、そういった人は恵みの福音にある自由を楽しんでいます。

平日の学びでダニエル書を見ていっていますが、ぜひ、1章後半部分のメッセージを聞いてください。そこで詳しく説明しましたが、当時のバビロンの社会でも、新約聖書のギリシア・ローマ時代においても、肉は大体、その国の偶像にまず献げられていました。献げた後に、肉が売られます。ですから、市場で売られているものは、偶像に献げられていますから、それに敏感に反応している兄弟たちもいたのです。

³ 食べる人は食べない人を見下してはいけなく、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったのです。

食べる人は信仰の自由を十分に楽しみ、肉を食べているのですが、食べない人たちを見て、「ああ、そういう規則にまだ縛られている。」と見下すことができます。その反対に、食べない人は食べている人を見て、「あの人は罪を犯している、神の基準から落ちている。はたしてクリスチャンのすることでしょうか。」と裁きます。

どちらの態度も間違っています。なぜなら、私たちの神は、どちらも受け入れているからです。受け入れているのに、私たちが受け入れないということは、私たちが神の前に立ちはだかって、人が神のところに来るのを妨げている、ということになります。パリサイ人たちが、これが理由でイエス様に咎められていました。イエス様は、罪人でも、取税人でも、遊女でも、近づいてくる者たちが近づくままにしておられました。子どもについては、弟子たちがそれをやめさせようとすると、憤りました。イエス様が受け入れているのですから、私たちが受け入れるべきだということです。

⁴ 他人のしもべをさばくあなたは何者ですか。しもべが立つか倒れるか、それは主人次第です。しかし、しもべは立ちます。主は、彼を立たせることができになるからです。

私たちが、他の兄弟たちについて、明らかな罪を犯しているわけではないのに、意見が自分と違うからと言って、その人がいかに神から離れているかなどと裁いたら、どういうことになるでしょうか？それは、主に対する越権行為なのです。「あなたは何者ですか」と言っています。つまり、自分自身を主と同じところに置いているのです。

すると、人にとっては、「そうやって、放置しているからいけないのだ。私が、その人を倒さなければいけないのだ。」として、情熱的に批判をして行ったら、次の言葉を思い出さないとはいけません。「しもべが立つか倒れるか、それは主人次第です。」自分は主人ではないのです、主が倒すことも立たせることもなさいます。さらに、自分は相手が倒れるのだ、倒れなければいけないのだと思っ

ているかもしれませんが。しかし、たとえもし、その人の意見がいかに間違っていると感じても、同じ人が思いを変えて、また立ち直るかもしれないのです。主が立たせてくださるのに、それを倒すような行為をすることは、不届き者ですね。けれども、それをやってしまうのが私たちです。信じていても、いや、信じているからこそ、その確信が他の人たちも同じなのだと思います。

2B 主に対する確信 5-6

⁵ ある日を別の日より大事だと考える人もいれば、どの日も大事だと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。⁶ 特定の日を尊ぶ人は、主のために尊んでいます。食べる人は、主のために食べています。神に感謝しているからです。食べない人も主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。

とても大切な点をパウロは、話しています。全く意見は違うのだけれども、実はそれぞれが、神に対する確信として、それらのことを行っているという事実です。ある人は、野菜だけ食べて、主への確信を保っています。他の人は、肉も食べて、主への確信を保っています。この確信を持つことが大事なんですね。確信は、それぞれの信仰の量りから来ています。それを持っていることです。その現れ方が、全く反対になることもあります。けれども、主にためにしているというところで一致しているのです。

ところでここで、「ある日を別の日より大事だと考える人もいれば、どの日も大事だと考える人もいます。」とあります。肉を食べるか食べないかということが、当時の教会の大きな問題になったのですが、安息日やその他の祭日についての考え方についても、ユダヤ教の中ではものすごく優先順位の高い戒律なので、大きな問題になりました。主ご自身が、パリサイ人と安息日の解釈で衝突されました。そして、主が甦られたあとに、キリスト者が安息日を守っている姿は出て来ません。出て来る時は、ガラテヤにある教会、コロサイにある教会など、律法主義に陥っている異邦人信者たちに、警鐘を鳴らしている場面においてです。

安息日は、モーセによるイスラエルとの契約、すなわち古い契約の中で印として与えられたものです(出エジプト 31:16-17)。したがって、異邦人が守るように命じられているものでは、そもそもありません。使徒の働きで見ると、日毎に家々に集まって、パンを裂いていたという、教会が誕生したばかりの時があります。それから、「週の初めの日」すなわち、イエスが甦られた日に集まることが書き記されています(使徒 20:7、1コリント 16:2)。パウロたち宣教の一行が、安息日に会堂に行っている姿を見ますが、それは礼拝のためではなく、伝道のために行っています(例:使徒 13:14-18)。

ですから、週の初めの日に私たちが集まることは、とても相応しいことです。イエス様が復活され、また五旬節の満ちた時、すなわち日曜日に聖霊が下り、教会が生まれたのですから、日曜礼

拝というのはふさわしい事です。しかし、使徒たちの手紙に週の初めの日に礼拝しなければいけないという命令はありません。集まらなければいけないという命令はあります、ですから私たちは集まって礼拝することは神の命令なのですが、何曜日に集まらなければいけないということは、教えとしては無いのです。ですから、どの曜日でも自分たちの決めた曜日に集まればよいでしょう。全ての日が主によって与えられており、キリストにあって安息日は成就したのですから、どの日でも良いのです。

けれども、そう考えない人々もいるということです。それがこの手紙に書かれている背景です。ある日を他の日に比べて、大事だと考えている人々がいるのです。ユダヤ人信者に、そういう人たちが多く今でも存在します。そして、セブンスデー・アドベンティストの人たちはまさに、土曜日こそが聖日と考えて礼拝しています。そして改革派と呼ばれる人々は、日曜日に安息日が移ったと考え、日曜日を働かないとして、安息日として厳格に守っている人々もいます。

3B 主に対する命 7-9

⁷私たちの中でだれ一人、自分のために生きている人はなく、自分のために死ぬ人もいないからです。⁸ 私たちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死にます。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

パウロがなぜ、ここでこんな話をしているかということ、兄弟の意見を裁くことが間違っていることを説明しているからです。私たちの生きている今の時代は、「裁いてはいけない」と聞くと、それは判断することはいけなかいかに受け止めます。けれども、それは間違いです。人のことを判断してはならないということ以上に、それぞれが主のものになっているということが、裁いてはいけない根拠になっています。すべての人が主のものになっています。主のために生きています。だから、自分自身が主の前で健全な良心をもって生きているのかどうか？が問われているのです。他の人についても、その人自身が主の前に出て、いかに歩んでいるのか？が問われています。ですから、人を裁くことは、その人のためというよりも、主の領域に入り込んでいる、越権行為だからいけないのです。

ところで今の時代、判断すること自体が悪と見なす傾向は、結局、ものすごく排他的になっています。罪を罪と言うことが、とてつもない罪であるかのようにみなされます。真の寛容は、相手が何をしてもよい、何を行ってもよいとすることではなく、また相手の意見をすべて同意することではなく、すべては主から来ている、この人も主によって立てられている、という主への恐れに基づいているのです。人のことに手を出すことは、主のものになっているのに手を出すのと同じなのです。

⁹キリストが死んでよみがえられたのは、死んだ人にも生きている人にも、主となるためです。

今、生きている人についてもイエスが主であるし、死んでいった人についてもイエスが主であるし、私たちが裁く立場にはいないということです。この甦られた方こそが、全てのことを、裁かれるのです。私たちがいかに、誤った考えを持っているかが分かるでしょう。しばしば、キリスト者たちの議論の中で、どの人が地獄に行き、天国に行ったのか、という話まで出てきます。これは、ゆゆしきことです。なぜなら、人を救うのは神であり、神が誰を救い、滅ぼされるのかをお決めになっているのです。よみがえられたイエス様が、死んでいる人にも、生きている人にも主となっておられるのです。

4B 神への申し開き 10-12

¹⁰ それなのに、あなたは どうして、自分の兄弟をさばくのですか。どうして、自分の兄弟を見下すのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つことになるのです。¹¹ 次のように書かれています。「わたしは生きている——主のことば——。すべての膝は、わたしに向かってかがめられ、すべての舌は、神に告白する。」¹² ですから、私たちはそれぞれ自分について、神に申し開きをすることになります。

午前礼拝でここからお話ししました、とても大事な真理です。兄弟を、意見の違いで見下したり、または裁いたりしながら、実は、自分自身が裁かれるという事実を忘れているのです。真実なへりくだりは、神への恐れから来ます。表向き、遠慮したりすることによって、自分がへりくだっているように見せても、結局、化けの皮がはがれます。自分を守ろうと自己正当化をしたり、あるいは極度に落ち込んだりして、ありのままの自分を受け入れられませんが、それは、真ん中に自我というものを持ち持っているからです。そうではなく、神が自分を裁かれる方であり、終わりの日にキリストの御座に出て、自分の行ったことのすべてが明らかにされるということなのです。

午前礼拝でお話ししたように、これは罪に定められる、罰せられるための裁きではなく、キリスト者にとっては、精錬されるための裁きです。真実に、信仰によって動いたことだけが残るようにしてください。そして栄光の姿に変えてくださるのです。

2A 躓かせない 13-23

そして、話は、兄弟を愛することに移ります。これまでは、兄弟を裁かないという、消極的なものでした。次は、兄弟のつまずきになるようなものは避けて、兄弟を建て上げることに専念するという、積極的な行動について述べていきます。これまでは、「神への恐れ」が根底にあります。次からは「兄弟への愛」が根底にあります。

1B 心を痛める兄弟 13-15

¹³ こういうわけで、私たちはもう互いにさばき合わないにしましょう。いや、むしろ、兄弟に対して妨げになるもの、つまずきになるものを置くことはしないと決心しなさい。

キリスト者の生活は、「何々をしない」という消極的な姿勢から、「何々をする」という積極的な姿勢があつてこそ、神の愛の律法を全うできます。イエス様が言われましたね、「マタ 7:12 ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。」そこで、「兄弟に対して妨げになるもの、つまずきになるものを置くことはしないと決心しなさい」となります。

イエス様は、ご自身について「マタ 11:6 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」と言われましたね。イエス様に付いて行くということは、自分にとっては試みになるようなことも付きまっています。その時に、自分を捨てて自分の十字架を負い、それでイエス様に付いていきますが、そのことをきっかけにして離れて行ってしまう人々もいます。それが、つまずきです。しかし、自分を捨てていき、十字架を背負うことによって、イエス様と私たちの愛はさらに堅く結ばれます。ですから、つまずきは避けられないもので、イエス様ご自身によってつまずくことはよくあります。

ここでは、イエス様ご自身以外で、妨げになること、つまずきになるものを置かないように決心しなさいということです。主の名によって行っているのに、実は自分自身の勝手な思い込みでやっている時に、相手は主のところに来るどころか、離れて行ってしまいます。へりくだって、ご自身のところに来るものは、すべて受け入れられる主は、そのような妨げやつまずきには、かなり敏感であります。「マルコ 9:42 また、わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、むしろ、大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよいのです。」

¹⁴ 私は主イエスにあつて知り、また確信しています。それ自体で汚れているものは何一つありません。ただ、何か汚れていると考える人には、それは汚れたものなのです。

パウロは、肉も食べる、何でも食べてよいという確信を持っています。それは、「主イエスにあつて知り、また確信しています」ということです。イエスご自身が教えられていたからです。「マル 7:18-19 イエスは彼らに言われた。「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか。外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。19 それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。」このように主がされたので、すべての物は清いのです。

この教えに基づき、パウロは手紙の中でも食物は、清いことを話しています。「コロ 2:16-17 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあつてはなりません。17 これらは、来たるべきものの影であつて、本体はキリストにあります。」律法にある、食物規定はキリストを表すものなのだと断言しています。ぜひ、ロゴス・ミニストリーのサイトから、レビ記 11 章のメッセージをお聞きください、あるいは読んでください。いかに、食物規定にいかにかキリストが表れているか、説明しています。さらに、テモテ第

一において、食物について「4:4-5 神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません。5 神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです。」とあります。ですから、これが使徒の教えです。もしこれと異なる教えをするならば、テモテ第一 4 章 1 節によれば「惑わす霊と悪霊の教え」であると言っています。

しかし、それを教えとしてではなく、まだ信仰によってその知識に追い付いておらず、それゆえ肉を食べると良心が痛むという人々には、愛による配慮が必要です。パウロは、「何か汚れていると考える人には、それは汚れたものなのです」と言っています。汚れているとみなしているところに、信仰があります。信仰が良心と共に働いており、その良心が痛むということは、信仰によらないで食べることになるのです。パウロは、その信仰が守られるよう、つまづかせないよう気を配っているのです。

私たちに与えられた、信仰の自由があります。神の恵みによって、これまでしばられていた規則や決まり事からも解放されます。ユダヤ人にとっては、様々な規定があったけれども、それを行わなくてよい自由が与えられます。けれども、それは愛をもって人々に仕えるために用いるべきです。「ガラ 5:13 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」愛によって仕えることができるようになるために、自由が与えられています。

先ほど、お話しした宣教師の友人のことですが、彼はギターから距離を取っていたということをお話しましたが、実は、教会で頼まれた時にはギターで賛美を導いています。彼は、まず信仰によって強められました。ギターを弾いても、昔のことを思い出さなくて済むようになったのでしょう。そして、教会の兄弟姉妹が賛美によって建て上げられることを願って、それでギターで賛美しているのです。信仰によって自由にされましたが、それを、愛をもって使えるために使っているのです。けれども、そこまで自由にされていない兄弟たちがいるのです。その人たちに対してやっていけないことも出てくる、ということです。

¹⁵ もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているなら、あなたはもはや愛によって歩んではいません。キリストが代わりに死んでくださった、そのような人を、あなたの食べ物の中で滅ぼさないでください。

「心を痛めている」とあります。私たちは、明らかに罪とみなされているものについて、キリスト者として、教会として心を痛めます。また、明らかに主が命じておられることを、それを行なわない姿を見る時にも心を痛めます(1ヨハネ 3:4、ヤコブ 4:17))。このようなものは、神に命じられていることであり、良い行ないについてであり、それを行なわないことは罪であり、また愛のない行為であるということが分かります。いわば「悪いこと」であると、すぐに見分けることができるものです。

けれども、問題は良いことについてなのです。食べ物について、肉を食べる自由が与えられたということは、良いことなのです。「知識としては正しいことで、自由にふるまえるべき良いこと」があります。その確信は正しいのです、良いものなのです。けれども、良いものだからこそ、最も大事なことを忘れてしまいます。それが、愛です。「1 コリ 13:2 たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。」そして同じコリント第一において、パウロが同じ「肉」の問題について語ります。「8:1 次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」愛するということこそ、初めて知識が生かされます。

パウロは、ここでは「キリストが代わりに死んでくださった、そのような人」と言っています。これは、その人のうちに価値があるということではなく、「キリストの価値がある」ということです。その人を見ることは、キリストがご自身の命をかけたその価値が置かれているということです。ですから、その人に罪を犯させて、躓かせて、滅ぼすことは、キリストが命を捨てられたその価値を無駄にすることに他なりません。

例えば、お酒のことを考えましょう。私は、一切、飲みません。第一テモテに、監督の資格の中に酒飲みではなく、というものがあり、酒を飲むことで、しばしばともなう放蕩から、完全に離れていることが必要だからです。泥酔や遊興は、肉の行いとして数えられています。けれども、イエス様がカナの婚礼で、水をぶどう酒に変えられましたし、お酒を飲むこと自体が罪であるとは聖書に書いていないと思います。お酒を一杯、飲んでも、それで酔い知れるわけではないということもあるでしょう。では、教会でお酒を飲むことは良いことでしょうか？これは実際起こったことですが、あるアメリカ人のクリスチャン家庭が、日本人のクリスチャンをホームステイで迎え入れていました。彼がお酒を飲んでいました。そのご主人が非常に傷つきました。彼は、過去にアル中だったので、信仰によって、アル中から解放されたのですが、家の中にお酒があること自体にもものすごい拒否反応が出たのです。これが、自分によって良いと思われていたことが、兄弟の心を痛めるということでもあります。

2B 神の国 16-18

¹⁶ ですから、あなたがたが良いとしていることで、悪く言われないようにしなさい。¹⁷ なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。

ここはとても大事なことです。教会で、神の国のこと以外のことが話題になったら、それは、どこかで間違っています。それぞれが主の前で確信を持っていればよいのに、それが良いこと悪いこととして言い合いになっていたら、神の国から外れていってしまいます。神の国では、まず、「聖霊」による賜物に満ちています。悪く言われているところには、肉の働きはありますが、聖霊がおられ

ません。そして「義」があります。裁いたり、見下したりすることが出てきている時は、「自分たちの義」が前面に出ている時です。自分の義ではなく、神の義が前面に出るべきです。神の義が出てくる時は、キリストの十字架が前面に出ています。すべての人が罪人で、恵みによって義と認められているという、平和と喜びがあるのです。救われたという喜びが出ています。

¹⁸ このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々にも認められるのです。

主に仕える人々が、どうあるべきか？まず、「神に喜ばれ」ることです。これが基本にあります。人を喜ばせることは難しいですが、神を喜ばせることは単純です。神を信じ、この方に拠り頼み、この方の言われることに従います。しかし、次に「人々にも認められる」ということもあるのです。人との関係性をなくして、神を喜ばせるということだけに集中し、それが争いや対立の元になっていることがあるのです。そういう人は、自分の言っていることはいかに聖書的であり、相手のしていることは、いかに間違っているか、御心から外れていることかを主張するのですが、神を愛し、そして隣人を愛するという、人との関係性があるこそ、神に喜ばれる生活なのです。

3B 平和 19-21

¹⁹ ですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。

私たちが求めるべきものが二つ書かれていますね、「平和に役立つこと」です。そして、「互いの霊的成長に役立つこと」です。平和は、本当に尊い神からの賜物ですね。その中にいるからこそ、私たちは自分は守られていると感じ、落ち着いた信仰生活を送ることができます。それを追い求めましょう。平和また秩序に気にかけることは、牧者や指導者だけの務めではありません。自分だけの必要を満たされることだけを考えるのではなく、一人ひとりが、平和に役立つことを考えるのです。

次に、「霊的成長に役立つこと」です。霊的に成長するためには、時に、自分が間違っていることを、愛をもって兄弟や姉妹から指摘されることも含まれます。その時はとても気分が悪くなるかもしれませんが、それを通して、改めて信仰のあり方を見つめ、成長する良い機会になります。愛によって真理を語り、それによってキリストの身丈にまで成長すると、エペソ4章に書いてあります。

²⁰ 食べ物のために神のみわざを台無しにはいけません。すべての食べ物はきよいのです。しかし、それを食べて人につまずきを与えるような者にとっては、悪いものなのです。

平和の実、徳を高めることによって建て上げられるはずの、そこにある神の国があるのに、食べ物がきっかけで、その業を台無しにしてしまう可能性があります。パウロは再び、確認しています。知識では、「すべての食べ物はきよいのです。」これが間違っているということを言っているのではありません。「それを食べて人につまずきを与える」ことが悪いのです。

²¹ 肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、あなたの兄弟がつまずくようなことをしないのは良いことです。

ここで、肉を食べない、ぶどう酒を飲まないというのは、律法主義や、禁欲主義ではありません。愛によってそのことを行なわない選択をする、その自由を行使しているのです。イエス様が、十字架から降りろと言われて、その力があっても、敢えてそれをしませんでした。それが愛です。同じように、肉を食べる、ぶどう酒を飲む自由があり、その力はあるのです。けれども、それを行なわない所に、愛があります。

4B 自分の中での確信

²² あなたが持っている信仰は、神の御前で自分の信仰として持っていなさい。自分が良いと認めていることで自分自身をさばかない人は幸いです。

結論は「神の御前で自分の信仰として持っていなさい」であります。私たちはもちろん、何が正しい事かの知識を得ていくことはしっかりと行わないといけません。信仰の確信は非常に尊いものだし、持ってないといけません。けれども、私たちには与えられている信仰の量りがあります。それを主に対して持っているということです。一定の信仰の段階に至ることがいない人がいるという現実があります。その時に、敢えてその自由を愛のゆえに行使しないということがあります。

「自分が良いと認めていること」があります。それで神を喜ばせているはずなのです。それが、他の兄弟のつまずきとなっているということで、その良いことによって自分自身が裁かれてしまう、というのは非常に残念なことです。そうしたことがない人は幸いです。

²³ しかし、疑いを抱く人が食べるなら、罪ありとされます。なぜなら、それは信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。

ここが最も大切と言ってもよいかもしれません。何をもって、私たちが罪に定められてしまうのか？「信仰から出ていないことは、みな罪」だとあります。これが、良心と信仰の関係であります。信仰からでなければ、まだそれが罪であると感じるのであれば、それは罪なのです。自分は大丈夫でも、相手は大丈夫でなければ、その人が罪を犯してしまうこととなります。同じことを行っても、ある人にとっては罪を犯し、つまずき、主から離れるということが起こるのです。

確信を大事にしてください。他の人たちがしているから、という理由で行わないでください。疑いながら行なうことは、罪なのです。教会は、それぞれに与えられている信仰の確信によって、自由が保たれています。それぞれが主に対して守っている時に、兄弟を愛し、相手の良心を尊重し、つまりは相手を受け入れることにつながります。いろいろ異なる賜物が与えられ、信仰の量りがそれぞれ異なります。しかし、キリストにあって一つであることは、受け入れるところに成り立っています。